

## 〈報告〉

2011年度さくらキャンパス全学生飲酒意識調査  
—順天堂大学さくらキャンパスにおける飲酒問題を考える  
基礎資料として—

森 詩穂美\*・木村 洋介\*・河合 祥雄\*

A 2011 Year –Survey concerning the attitudes towards alcohol drinking among college students at Sakura Campus, Juntendo University. Basic data concerning alcohol-related problems at Sakura Campus.

Shihomi MORI\*, Yousuke KIMURA\* and Sachio KAWAI\*

#### Abstract

**OBJECTIVE:** This study aimed to examine the attitudes of students toward drinking at Sakura Campus, Juntendo University in complete enumeration.

**MATERIAL AND METHODS:** All 1,455 students were asked to take part in a questionnaire survey about the attitudes towards drinking problems.

**RESULTS:** Ninety-three percent of students completed the survey. Thirty-three percent of the students were minors. Experience of drinking was observed in 90% of the students, and 78% of 449 minors. Habitual drinking was observed among 1,212 students. Twenty-one students, including five minors, admitted to drinking everyday. Reasons for drinking alcohol regularly were “indispensable material for facilitating conversation with friends (51%),” no reason, a habit (17%), “I like alcohol (31%)”, and “to forget unpleasant things (6%)”. Drinking induced headache and vomiting had been experienced in the majority of students. Usage of offensive language (5%) and acts of violence (2%) were noted. Extortion under the influence of drink was experienced by 772 of 1,345 students (54%), by college seniors (55%) and college friends (29%).

**CONCLUSION:** Tacit approval of underage drinking and forced drinking were disclosed at this campus. Drinking parties have actually been an extension of club activities. Excessive drinking had been forced due to the upper and lower relationships in the college athletic clubs. Based on these facts, alcohol education programs should be constructed.

Key words: Extortion of drinking, binge drinking, drinking behavior in athletic clubs, alcohol harassment

## 1. 緒 言

本キャンパスは健康学科を有するが、学生を対象とした飲酒状況調査やアルコール意識調査は少な

い<sup>9)</sup>。2009年秋に行った無記名アンケート「飲酒に関する大学生の意識調査」<sup>11)12)</sup>の回収率は1年生69%、2年生35%、3年生40%、4年生38%、全体で63%であった。2009年の調査は、本学学生の飲酒に関する幾つかの問題(未成年飲酒, 飲酒強要・被強要, 強制飲酒を許容する風土, 飲酒を悪癖ととらえる学生の存在など)を明らかにしたが, 低い回収

\* 順天堂大学スポーツ健康科学部スポーツ医学研究室  
Research Laboratory of Sports Medicine, School of  
Health and Sports Science Juntendo University.

率はその実態の信頼性に疑問を投げかけうる。全学生を対象とした悉皆調査は本学学生が飲酒に関してどのような意識をもち、どの様な自己管理をしているかの実態を明らかにするために必要であろう。スポーツ健康科学部生が持つ問題意識、医学部生のもつ問題点、自己管理の内実、飲酒による体調不良やパフォーマンス低下などの飲酒に関する問題点および改善点を見出すことは本学学生の適正飲酒教育に貢献し、アルコールハラスメントを防止することに役立つと考えられる。

## 2. 目 的

「飲酒に関する大学生の意識調査」(眞崎 睦子：北大生101人と飲酒)<sup>5)</sup>のアンケート調査用紙を運動競技者に使用できるように平成21年度に改変した調査用紙<sup>11)12)</sup>と同様のものを用い、本キャンパスに在籍する全ての学生の飲酒意識調査を行い、2009年の調査で明らかにされた未成年飲酒、飲酒強要・被強要、強制飲酒を許容する風土、飲酒を悪癖ととらえる学生の存在などの確認および改善点を見出すことを目的とした。

## 3. 対象とアンケート配布・回収方法

順天堂大学スポーツ健康科学部1年生は啓心寮に居住しているものを対象として2011年10月6日にアンケートを配布し、2年生のスポーツ科学科と健康学科の学生は2011年10月31日の運動生理学Ⅰの授業、マネジメント学科の学生は2011年11月7日のスポーツ社会学の授業にて、3年生、4年生は各所属ゼミナールに対して2011年11月1日にそれぞれ全員にアンケートを配布した。1年生は啓心寮にて、2年生は授業時間内に、3年、4年生はゼミ単位で健康管理室にてアンケートを回収した。

## 4. 方 法

今回の調査では平成21年度の調査と同様のアンケート<sup>11)12)</sup>を使用した。意識調査は無記名アンケートとして、「飲酒に関する大学生の意識調査」<sup>5)</sup>を改変したものを用い、飲酒経験、飲酒強要・被強要、

飲酒教育、アルコール体質、運動頻度などを調査した。追加した項目は、現在の競技に対する取り組み方(真剣度: Visual analog scaleで0から10までに数値化したもの、週あたりの練習日(日)、一日あたりの練習時間(時間)、運動(練習や実技授業)や試合の前日にアルコールを控えかどうかの項目であり、削除した項目はAA(Alcoholics Anonymous)、Al-Anon、断酒会に関する項目(Q17-Q22)である。

アンケートの冒頭に、(1)調査結果を、授業の中での教材もしくは今後の学生指導の資料として学内外で利用すること、(2)無記名アンケートであり個人のプライバシーの侵害等、記入したことによる不利益は一切ないこと、(3)意識調査中に肉体的・精神的苦痛を訴える場合、調査用紙の記載を途中で中断しても何らかの精神的・身体的不利益を被るものではないこと、を明記した上で調査を行った。

本調査は、「体育系大学生の飲酒意識調査および主観的アルコール濃度判断に関する検討」として、研究倫理等審査を経ている(順大ス倫第21-3号)。

配布枚数は啓心寮在寮の1年生(スポーツ健康科学部ならびに医学部)の総数である453枚、2年生に対して332枚、3・4年生のゼミナール所属人数である660枚の計1455枚であった。アンケートの最終回収は2011年12月22日で、その時点までに回収できた1351枚(全体の回収率92.8%)について検討を加えた。

アンケートの回収枚数は1年生325枚(98%)、2年生314枚(95%)、3年生306枚(94%)、4年生301枚(88%)に加え、医学部1年生105枚(85%)であった。

## 5. 結 果

詳細は以下に表1から表18で示す。また、学年別の回答結果の表内の( )の%は学年内の総和に対する割合を示す。

### 5-1 対象者背景

以下は回答者の基本情報である。年齢記載のある1341例中、20歳(31%)が最多で、未成年は33%、

成人は66%であった(表1)。男911名, 女440名(男子67%: 女子33%)で, 生活環境は寮が46%と最多で, 一人暮らしが43%, 実家が11%, その他の選択者は全員ルームシェアをしている学生であった(表2)。回答した1年生(全員寮生)の総数430名は32%にあたる。

## 5-2 飲酒状況

飲酒経験のある者は回答者1349名中の1208名(90%)であり, 未成年者449名中348名(78%)は飲酒経験があることが明らかにされた。飲酒経験者の割合は学年が上がるにつれて, 1年生76%から, 90%, 96%と増加し, 4年生で100%であった。啓心寮で同室生活をしている1年生を比較すると, 医学部1年生の飲酒経験のある者は82%で, スポーツ健康科学部1年生の76%より6%ほど多い(表3)。

### 5-2-1 定期的飲酒

以下は定期的に飲酒をしている学生(1212名)の状況について調査したものである。なお, Q9から

表1 Q2. 年齢を( )内にご記入ください。

	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳
人数	150	299	420	220	209	38
%	11%	22%	31%	16%	16%	3%

表2 Q6. あなたの生活環境を選んでください。

	実家	一人暮らし	寮	その他
人数	143	574	617	12
%	11%	43%	46%	1%

表3 Q7. 飲酒経験がありますか(学年別の回答結果)

	はい	いいえ
1年生	248(76%)	77(24%)
2年生	280(90%)	32(10%)
3年生	293(96%)	13(4%)
4年生	296(100%)	0(0%)
医学部1年生	86(82%)	19(18%)

Q12は, Q8にて「はい」と回答した学生のみに回答してもらった。

1212名中435名(36%)の学生が定期的に飲酒をしており, 学年が進むにつれ定期的に飲酒をする学生の割合が高くなること(表5)が示された。医学部1年生の37%が定期的に飲酒をしており, スポーツ健康科学部1年生に比べ7%も多い。飲酒頻度を見ると(図1), 週1回, 月1回の飲酒頻度の割合が高い(図1)。その他の回答では週2・3回(3, 4日に1回程度)という回答が多数であった。毎日飲

表4 Q8. あなたは定期的にアルコール飲料を飲んでいますか?(学年別の回答結果)

	はい	いいえ
1年生	75(30%)	177(70%)
2年生	87(31%)	201(69%)
3年生	120(41%)	173(59%)
4年生	121(41%)	175(59%)
医学部1年生	32(37%)	54(63%)

表5 Q11. あなたは飲酒によって次のようなことを経験したことがありますか?(複数回答可)

	回答数	%
頭痛	704	58%
嘔吐	774	63%
一時的に記憶を失う	296	25%
二日酔いで学校に遅刻する	216	18%
二日酔いで学校を欠席する	167	14%
暴言を吐く	61	5%
暴力を振るう	22	2%

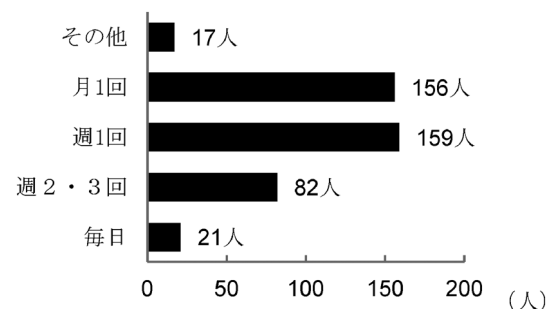


図1 Q8. 次のうちから頻度を選んでください

酒しているという学生は21人と少数ではあるものの、そのうち5名は未成年であった。

定期的に飲酒する理由(複数回答可)として、「アルコール飲料を友人との会話を楽しむ材料として欠かせない」との回答が221件(51%)であったが、次いで「アルコールが好きだから」135件(31%)、「習慣になっていて特に理由がない」74件(17%)、「嫌なことを忘れるため」26件(6%)、「アルコール飲料がないと眠れない」6件(1%)、「その他」53件(12%)であった。

頭痛、嘔吐を経験している学生は半数を超え、全項目において上級生の方が下級生よりも高い値を示した(表5)。その中でも暴言を吐く61名(5%)、暴力を振るう22名(2%)が目された。また、この項目のどれも経験をしたことのない学生は384人(全体の32%)であった。

### 5-3 飲酒の被強要・強要

飲酒を強要された経験があると回答した学生は1345名中722名(54%)であり、学年が上がるにつれてその割合は増加した(表6)。そのうち58%は強要されるがまま飲酒をし、断ったのはわずか3%

表6 Q13. あなたは飲酒を強要されたことがありますか?(学年別の回答結果)

	はい	いいえ
1年生	122(38%)	202(62%)
2年生	155(50%)	156(50%)
3年生	196(64%)	109(36%)
4年生	199(67%)	96(33%)
医学部1年生	47(45%)	58(55%)

表7 Q14. 飲酒を強要されて、あなたはどうしましたか?

	人数	%
断った	24	3%
少量飲んだ	266	37%
強要されるがまま飲んだ	417	58%
その他	12	2%

であった(表7)。強要してきた人物は55%が大学の先輩であり、次いで大学の友人が29%であった(表8)。その他は、「地元の友人・先輩」「教育実習先の先生」「学外チームの先輩」「アルバイト先の客」などであった。

一方、強要をしたことがある学生は1342名中297名(22%)のみであったが、学年が上がるにつれ強要した者の割合は多くなった(表9)。強要した相手は53%が強要されたまま飲酒をし、断った者は3%のみであった(表10)。強要した相手は大学の友人、大学の後輩が約3割と多く、次いで大学の先輩が25%であった。その他は「地元の友人・先輩」がほとんどであった(表20)。スポーツ健康科学部の

表8 Q15. あなたに飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか?(複数回答可)

	男	女	回答数合計	%
大学の先輩	547	241	788	55%
大学の後輩	68	61	129	9%
大学の友人	269	144	413	29%
大学の指導教員	5	0	5	0%
アルバイト先の先輩	32	12	44	3%
アルバイト先の友人	11	10	21	1%
アルバイト先の上司	7	0	7	0%
家族・親族			3	0%
その他			31	2%

表9 Q16. あなたは飲酒を強要したことがありますか?(学年別の回答結果)

	はい	いいえ
1年生	32(10%)	293(90%)
2年生	49(16%)	262(84%)
3年生	90(29%)	216(71%)
4年生	110(37%)	186(63%)
医学部1年生	16(15%)	88(85%)

表10 Q17. あなたが飲酒を強要した結果, その相手はどうしましたか?

	人数	%
断った	9	3%
少量飲んだ	117	42%
強要されるがまま飲んだ	146	53%
その他	6	2%

表11 Q18. あなたが飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか?(複数回答可)

男		女		回答数 合計	%
大学の先輩	103	大学の先輩	78		
大学の後輩	159	大学の後輩	76	235	32%
大学の友人	163	大学の友人	92	255	35%
大学の指導 教員	0	大学の指導 教員	0	0	0%
アルバイト 先の先輩	11	アルバイト 先の先輩	9	20	3%
アルバイト 先の友人	10	アルバイト 先の友人	11	21	3%
アルバイト 先の上司	4	アルバイト 先の上司	1	5	1%
家族・親族				0	0%
その他				16	2%

1年生と医学部の1年生の結果を比較すると, 飲酒を強要された割合も強要した割合も, 医学部の学生の方が高い値を示した。

#### 5-4 アルコールへの意識

酩酊状態の人と同席をしたことがある学生は1338名中922名(約7割)であり, その割合も1年生51%, 2年生62%, 3年生78%, 4年生84%と学年が上がるごとに高くなった。また, 医学部1年はスポーツ健康科学部1年生の数値に比べ, 73%と高い結果を得た(表12)。酩酊状態の人を見ての感想で, 一番多かった回答は「他者への言動」で43%, 次いで「何も気にならない」32%であった。自・他への暴力行為はそれぞれ11%, 22%を占めた(表13)。

より学年が上がると割合は増えるが, アルコール

表12 Q19. あなたは酩酊状態の人と同席したことがありますか?(学年別)

	はい	いいえ
1年生	166(51%)	157(49%)
2年生	191(62%)	119(38%)
3年生	238(78%)	66(22%)
4年生	253(84%)	48(16%)
医学1年	77(73%)	28(27%)

表13 Q20. その場合アルコール飲料を飲んでいる人, あるいは酩酊状態の人に関して, あなたが気になるのは次のうちどのようなことですか?(複数回答可)

	回答数	%
何も気にならない	292	32%
におい	202	22%
自分への言動	165	18%
他者への言動	396	43%
自分への暴力行為	106	11%
他者への暴力行為	205	22%
その他	81	9%

飲料を薬物の一種だと認識している学生は全体では1334名中の477名(36%)に過ぎなかった。

#### 5-5 飲酒教育のあり方

学校教育の中でアルコール飲料に関する教育が必要だと感じている学生は全体の1326名中1102名(83%)で, 学年が上がるにつれ, 飲酒教育の必要性を感じている学生が増加している(表14)。どの段階で飲酒教育をするべきかという意見では, 小学生16%, 中学生52%, 高校生は31%であり(表15), Q26はその理由の記載である。以下に代表的ならびに注目に値すると考えられる意見を枚挙した。

#### Q26. アルコール教育開始時期についての意見 〈小学生選択者意見〉

「CMなどでお酒を売りだしたりされていて, 目にする機会が多々あるため。」「アルコールに触れる年齢が年々幼くなってきているように思う。ノンアル

表14 Q24. あなたは学校教育の中でアルコール飲料に関する教育が必要だと感じますか(学年別の回答結果)

	はい	いいえ
1年生	220(70%)	96(30%)
2年生	255(83%)	54(17%)
3年生	276(91%)	27(9%)
4年生	274(93%)	20(7%)
医学部1年生	77(74%)	27(26%)

表15 Q25. アルコール飲料に関する教育は次のうちの段階で始めるべきだと思いますか?

	人数	%
小学校低学年	32	3%
小学校中学年	35	3%
小学校高学年	113	10%
中学校1年生	302	27%
中学校2年生	115	10%
中学校3年生	170	15%
高校1年生	195	18%
高校2年生	46	4%
高校3年生	100	9%

コール飲料の幅も広がり、その境界が曖昧になりがちである。」

〈中学生選択者意見〉

「中学くらいから上下関係がつくられ、その中で誘われても知識があれば判断も変わってくると思う。酒にしてもタバコにしても基本的な知識が必要になってくると思う。」  
 「成長期という大事な時期であるから。」  
 「自分が中学生から飲酒していたから。」

〈高校生選択者意見〉

「アルバイトを始めると飲酒の機会が増えるから。」  
 「大学生になれば未成年でも飲むことが当たり前になるからその前に。」

### 5-6 アルコールと運動

表16は本学の学生の競技競技に対する姿勢を visual analog scale で数量化した値の平均値であ

表16 Q4. Q5. あなたの現在の競技に対する真剣度と運動習慣をお答えください.

	真剣度	週あたり(日)	一日あたり(時間)
全体平均	7.1	4.6	2.8
医学部平均	6.9	3.1	2.6

表17 Q27. あなたは運動(練習や実技授業)や試合の前日にアルコールを控えますか?

	人数	%
運動の前日も試合の前日も控える	818	63%
運動の前日は控える	113	9%
試合の前日は控える	277	21%
運動の前日も試合の前日も控えない	75	6%
その他	24	2%

表18 Q28. 運動や試合前日にアルコールを摂取した場合、パフォーマンスに影響を及ぼした経験はありますか?

	人数	%
影響を及ぼした経験が無い	872	67%
良い影響を及ぼした	43	3%
悪い影響を及ぼした	227	17%
その他	161	12%

る。予想に反して、スポーツ健康科学部全体と医学部1年生間には真剣度において大きな差は見られなかった。

運動の前日も試合の前日も飲酒を控えるとの回答は全体、学年別ともに約6割であった。一方、どちらも控えないという学生はスポーツ健康科学部の学生は各学年6%以下であったが(表17)、医学部1年生は14%であった。飲酒の結果どのような影響を及ぼしたかということについて、影響を及ぼした経験が無い学生は、全体、学年別ともに約7割であった(表18)。また、良い結果よりも悪い結果を及ぼした学生割合が6倍も高い(3% vs. 17%)ことも示された。その他の回答数には飲酒自体の経験がないという回答も含まれていた。

### 5-7 自由記載意見

Q29. もしよろしければアルコールにまつわるご経験, ご感想などをご記入ください.

〈未成年者意見〉(医)は医学部1年生の意見)

○私は小学高校学年頃に家族と食事に行った際に隣に座っていた父の日本酒を水と間違えて飲んでしまい体調を崩した経験がある. そのためこれ以来お酒が嫌いである. お酒が好きなはその人の勝手だと思いが, 周りに迷惑をかけないように責任のある行動をしてほしい. ○(医)アルコールに致命的に弱いので学校をあげての飲み会などがあるとつらいです. ○(医)飲んだ翌日, 全裸になっていた. ○アルコールを飲んでいても楽しいと思わない. 気分が良くならない.

〈成人意見〉

○高1の時の先輩(高3)の引退試合で飲みオールがお決まりだったため, 高1で飲まされた. ○新歓で強要され, お酒を飲むことが怖くなった. ○吐血. ○この世にいらぬ. ○「最初はとりあえずビール」が蔓延しているのが不快だし, それを強要, 得意がる様子を見ると苛立つ. ○酔っ払いに絡まれた経験がある. ○朝起きたら自宅のトイレで寝ていました. ○たくさん飲んで4時間あまり記憶を失くし, 迷惑をかけた. ○終電なくした. ○急性アルコール中毒になったことがあります. ○コールはしんどい. ○吐き気でトイレから出られなくなった. 仲間が泥酔状態になり, 歩みを止めたり, 道端で寝たりしてしていて, 対応が大変だった. ○体がだるくなり, 体操競技においての感覚が悪くなった. ○アルコールを飲んで酔っ払った友人が財布を失くしてそれを一緒に探した. ○アルコールの過度の摂取により友人の人格が変わってしまい大変だった. ○友人が倒れて意識不明. 無意識に吐いたり排尿したり. ○先輩にコールかけられてアル中になりかけた. 嫌と言ったのに飲ませてきたので本当に嫌だった. ○救急車で運ばれた. ○一気飲み, 飲みすぎは良くない. ○酔った勢いで店の壁を壊した同級生がいた. ○自分で気付かずにコールで強制してしまったと思う. ○一度, 飲みすぎた次の日, 嘔吐す

る物が無いのに嘔吐し続けたことがある. ○受験前日(実技・学科)にお酒を飲んで緊張をほぐして上手くいった. ○少量のアルコールであれば身体の疲労などが抜けることがある. ○筋肉量が落ちてしまうような感じがあった. 新歓, 追いコン以外は飲まない. ○寮で多い問題の一つが飲酒. その対応に関して三役・室長の対応力が求められる.

## 6. 考 察

### 6-1 対象者背景

本調査は悉皆調査を目標としたが93%の回収率に留まった. 強制でない調査であるための限界と考えるが, 未成年飲酒, アルコールハラスメントが社会問題化している昨今, 調査に応じない7%の学生がいかなる飲酒意識を持つか, いかなる飲酒行動をとっているのかのデータは無視してよいはずがない. 将来はある程度の強制力を有する全学あげての調査も必要であるかもしれない.

今回の調査は男女比が約7:3で, 全体の1/3が未成年であった. 平成21年度の調査<sup>11)12)</sup>(以下, 前回調査)と年齢, 性別の割合もほぼ同じであった<sup>12)</sup>. 生活環境は寮生活が46%で一番多いが, スポーツ健康科学部と医学部の1年生は全寮制であること, また上級生でも部活動ごとの寮で生活している学生が多いためと考えられた.

### 6-2 飲酒状況

日本のアルコール消費量は年々増加の一途をたどっており, 最近では女性, 未成年者, 高齢者の飲酒問題が表面化している<sup>14)</sup>. 高校生を対象とした調査においても, 飲酒経験を持つ高校生は7割に達し, 高校生にとって飲酒はありふれた行動の一つ<sup>11)</sup>と言える. 今回の調査では飲酒経験を持つ学生は90%で, 未成年者の78%が飲酒していることが明らかになった. 高校時代の運動部における飲酒行動(自由意見参照), 大学入学後の歓迎会や飲み会などの場において飲酒をすることが許される慣習, アルコールを扱う店において, 義務とされている年齢確認が徹底されていないことも原因の一つとして考えられよう. また, 4年生では飲酒経験が100%であるこ

とは、日本人を含めたアジア人種における酒に弱いタイプ、飲めないタイプの一定程度の存在<sup>14)</sup>、aldehyde dehydrogenase genotype 2の遺伝子多型<sup>15)</sup>を考えると、飲めない学生への飲酒強要の背景が浮上してくる。

定期的に飲酒をしている学生は36%であり、北海道大学の学生の45%<sup>6)</sup>と比較すると少ない。これは前回調査<sup>12)13)</sup>と同様で、理由として部活動との関連を考えたい。しかし毎日飲酒をしている学生が21名(うち未成年5名)存在したことも、将来におけるアルコール中毒者の形成に係わる重要な事実であろう。

定期的な飲酒の理由として「友人との会話の材料として欠かせない」が半数を占めたことは、一人で飲酒をしている者は少ないことを示している。大学生を対象とした飲酒の効果と期待を規定する調査において、友人と一緒に飲酒をする時の意図は「いい気分・社交促進期待」「ストレス解消期待」「体調悪化・気分悪化期待」「攻撃性増大期待」の4つに大きく規定され<sup>3)</sup>、その中でも「いい気分・社交促進期待」の割合が一番大きい<sup>3)</sup>とされる。今回の調査結果と関連付けて考えると、半数以上の学生が「飲酒自体を楽しむ」というよりも一緒に飲酒をする人との「社交」を楽しむために飲酒をしていると考えられる。しかしながら、「友人との会話の材料として欠かせない」の次ぎに続く理由が「アルコールが好きだから」135件(31%)、「習慣になっていて特に理由がない」74件(17%)、「嫌なことを忘れるため」26件(6%)、「アルコール飲料がないと眠れない」6件(1%)であったことは、将来のアルコール中毒者の予備軍を形成しうる飲酒理由として、改善すべき問題と考える。特に、アルコールは嫌な記憶を逆に強化することが最近明らかにされている<sup>9)</sup>ので、この誤った常識の是正が焦眉の急であろう。

飲酒をした際にどのようなことを経験したかという設問の回答が表5である。頭痛、嘔吐を経験している学生は半数を超え、全項目において上級生の方が下級生よりも高い値を示した。「頭痛」「嘔吐」「一時的に記憶を失う」は飲酒が回答者の身体に及

ぼす影響であり、「二日酔いで学校に遅刻する」、「二日酔いで学校を欠席する」では飲酒が学生生活に与える影響である。今回の調査では32%の学生が二日酔いにより学校を遅刻あるいは欠席を経験している。これは中日本自動車短期大学の7.2%<sup>7)</sup>と比べれば圧倒的に多く、本学として問題視しなければいけない事実であろう。また、自身のアルコール耐性について、十分またはある程度理解している学生はいるようであるが、身体あるいは学業に支障をきたすまで飲酒をしてしまうのはなぜなのか。これは「ストレス解消期待」「体調悪化・気分悪化期待」「攻撃性増大期待」を意図として飲酒をする者も多数いる<sup>3)</sup>ためだと考えられる。

また、この項目のどれも経験をしたことのない学生は384人(全体の32%)であったが、暴言を吐く学生(61名:5%)、暴力を振るう学生(22名:2%)の存在が明らかにされ、マナーを超えた、ハラスメントの対象として対処する必要があるであろう。「お酒が好きなのはその人の勝手だと思うが、周りに迷惑をかけないように責任のある行動をしてほしい。」という自由記載意見が示唆するように、他人へ迷惑をかけないように適切な飲酒をすべきだと考えている学生も多数いることが明らかになった。日本人の約半数はALDH2を欠いているいわゆる「酒に弱い体質」である<sup>14)</sup>ので、本学では健康総合大学としてエタノールパッチテストを超えて、aldehyde dehydrogenase genotype 2の遺伝子多型<sup>15)</sup>検査を行うなどして、自己の体質を認識する機会を与えるべきであると考ええる。

### 6-3 飲酒の強要

我が国のアルコール消費量の増加と並行して、アルコール依存症や飲酒に関連した交通事故や犯罪、急性アルコール中毒、アルコールハラスメントなどの問題も起きている<sup>1)</sup>。今回の調査では、飲酒を強要されたことがある学生は54%であったのに対し、飲酒を強要したことがある学生は22%であり、32%の差が見られた。この結果は前回調査とほぼ同様であった<sup>12)13)</sup>。この割合の差の背景には、アルコール飲料に関する基礎的な知識があるにもかかわらず、



自分達が行っている行為がアルコールハラスメントであるという認識が不足しているため<sup>11)</sup>であると考えられる。自由記載意見にも「自分で気付かずにコールで飲酒を強制してしまったと思う」という意見があった。飲酒の被強要・強要は北海道大学学生にくらべ、本学学生の方が高く(強要されたことがある; 54% vs. 42%), (強要したことがある; 22% vs. 14%)<sup>6)</sup>, 学生のほとんどが部活動に所属しており, 強要してきた人物の半数が, 大学の先輩や年上であり, 上下関係がある「体育会系の」飲酒行動が規定されている可能性を前回同じく指摘できよう。

この飲酒の強要に起因する大学生の「事故」としては, 1999年, 熊本大学医学部1年生が新歓コンパ恒例のバトルという「飲み比べ」の後, 死亡したケース<sup>6)</sup>, 2002年, 神戸大学の教官(当時)が実験の失敗を理由に飲酒を強要し, 2名が急性アルコール中毒で入院したケース<sup>6)</sup>, 2012年5月小樽商科大学アメリカンフットボール部の飲み会で未成年7名を含む9名が搬送され, 19歳の1年生男子部員が死亡した事件はまだ, 記憶に新しい。同部では4年生が1年生に酒を注ぐ伝統が有ったと報道されている<sup>2)</sup>。また, 平成10年度の東京消防庁調べによる急性アルコール中毒の救急搬送数は10868人中, 20歳未満1211人, 20歳代5295人である<sup>8)</sup>。本学学生には, 「新歓で強要され, お酒を飲むことが怖くなった」「先輩にコールかけられてアル中になりかけた。嫌と言ったのに飲ませてきたので本当に嫌だった」という意見があるように, 飲酒の強要に対し否定的である学生が多数いるということが示された。

#### 6-4 アルコールへの意識

酩酊状態の人と同席した経験がある学生は69%であり, 年齢が上がるにつれその経験の値は高くなった。スポーツ健康科学部1年生と医学部1年生には22%の差があり医学部の学生の方が経験値は高かったが, これは医学部の主キャンパスが東京にあること, 経済的に豊かな上級生・部のOBが多いことから, 二次会付きの飲酒の機会が多いためだと考える。

酩酊状態の人に対する感情(Q20, 表13)に関する回答で, 注目すべき点は他者への言動, 暴力行為

が65%, 自分への言動, 暴力行為が29%も存在したことである。これは前回調査, 北海道大学の調査<sup>6)</sup>とも同様の結果であった。これには「飲食中の同席者が何を言っても, 自分に向けられたものならお酒が入っているからとあきらめもつくが, これが他の人に向けられたらどうなるか心配になる」<sup>6)</sup>という心理的背景があるためだと考えられる。

アルコールは自発的に摂取して酔うということが法律的にも社会的にも広く受け入れられる唯一の強い向神経作用を持った薬物である<sup>16)</sup>。また, ナショナルフットボールリーグは1982年にアルコールを薬物とみなしている<sup>16)</sup>。本学ではアルコールを薬物の一つと認識している学生が36%しかおらず, アルコールに関する知識が多くないことが明らかにされている。

#### 6-5 飲酒教育のあり方

現在, 日本における飲酒についての教育は, 中学校では保健体育:[保健分野]:(エ)健康な生活と疾病の予防(喫煙, 飲酒, 薬物乱用と健康)というカテゴリー, 高等学校では保健体育:保健:(1)現代社会と健康:(イ)健康の保持増進と疾病の予防というカテゴリーでわずか1行(「喫煙と飲酒は, 生活習慣病の要因になること」)取り上げられているだけである<sup>13)</sup>。また中日本自動車短期大学の学生を対象とした調査では, 約半数が飲酒教育を受けたと答えているが, 受けていない, 受けたかどうか分からないと回答した学生も約半数であり, 半数の学生は飲酒教育に対しての意識及び知識が無いと思われる<sup>8)</sup>。

今回の調査では飲酒教育が必要であるという回答は83%であったが, 本学学生のアルコールに対する知識の低さ(考察6-4)からも, 飲酒教育の内容を改善, もしくは各学科共通の飲酒教育が授業に組み込まれる必要があるのではないかと考える。また, 啓心寮においても同様のことが言える。スポーツ健康科学部と医学部の1年生は全寮制であり, その中でも成人と未成年が混在している。「寮で多い問題の一つが飲酒。その対応に関して三役・室長の対応力が求められる。」という意見があるように, アル

コールに限らず薬物などにおいても教育の機会を設け、その後の大学生活、社会生活に活かせるようにすべきであろう。

### 6-6 アルコールと運動

低用量のアルコールは抗不安作用を持っており理論的にはパフォーマンス強化をもたらすこともありうる。しかしこれまでの研究は、一貫して、アルコール影響下にある被験者で精神運動技能のいくつかの面で有意な障害がみられることを示している<sup>15)</sup>。

今回の調査では、試合前日および運動の前日に飲酒を控える学生は93%存在し、アルコールは運動にマイナスの作用を持つと考えている学生が多いと考えられる。しかし医学部1年生は運動・試合の前日共に飲酒を控えないという割合が学年別で一番多く、これは所属部活動の競技レベルが、全体としては、スポーツ健康科学部所属の運動部活動レベルに比較して低いためと考える。

自由記載意見からも、「受験前日(実技・学科)にお酒を飲んで緊張をほぐして上手くいった」「少量のアルコールであれば身体の疲労などが抜けることがある」という飲酒のポジティブな効果の意見から、「体がだるくなり、体操競技における感覚が悪くなった」「筋肉量が落ちてしまうような感じがあった。新歓、追いコン以外は飲まない」という否定的な意見まであり、アルコールと運動の関係性は人それぞれであり、個々人が自分のアルコールに対する意識を自覚することが重要である。

### 6-7 自由記載意見

アルコールに対して肯定的な意見から、「この世にいない。」という否定的な意見まで様々であったが、前回調査と同じく、全体的に飲酒に対して否定的な意見が多く見られた。また「飲みすぎると蕁麻疹が出る」「つい飲み過ぎてしまい身体がかゆくなった」「ビールを飲みすぎて泡を吹いて倒れたことがある。」など、飲み過ぎから身体に症状を現した経験のある学生も数名おり、自分の身体を守るためにも自分の体質、耐性を知っておくことの重要性が示された。

## 7. 結 論

今回の調査では本学の学生の飲酒行為に関する問題、未成年の飲酒問題が浮き彫りになった。すなわち、健康総合大学でありながら、未成年者飲酒を黙認する現状があり、スポーツ健康科学部の学生は飲酒を控える傾向にあるが、飲酒強要の割合は北海道大学学生の数値を上回った。その傾向は医学部1年生においてより明らかであった。この事実は「酒の場」が部活動の延長であり、スポーツ健康科学部、医学部を問わず、上下関係に沿う形での飲酒の強要(いわゆる「体育会系」の飲み方)が存在する可能性が高いことを示唆していよう。この現状を踏まえ、改めて大学をあげて飲酒教育について考え直す必要性が示された。

## 謝 辞

本調査をご許可賜りました前学生部部長(金子今朝秋先生)、啓心寮総寮監(佐久間和彦先生)、学生相談室室長(廣澤正孝先生)に深謝致します。また、回答者の方々およびアンケート配布・回収にご協力下さりました、健康管理室乙丸知子看護師、啓心寮係員根岸隆介様、スポーツ健康科学部ゼミナール担当の諸先生に深く感謝の意を表します。

## 引用文献

- 1) 青木大地(2010). 大学生の飲酒行動・意識・知識に関する研究—アルコールハラスメントに着目して—, 茨城大学教育学部 保健体育撰修・スポーツコース・健康コース 卒業研究発表会会議録 ([http://sport.edu.ibaraki.ac.jp/semi/2010/m\\_program2010.htm](http://sport.edu.ibaraki.ac.jp/semi/2010/m_program2010.htm)) 1-2.
- 2) 北海道新聞(2012). 2012年6月28日朝刊掲載 (<http://www.hokkaido-np.co.jp/news/donai/383376.html>)
- 3) 金地美知彦(2007). 飲酒を規定する心理学的要因の検討—飲酒効果の期待, 飲酒に対する態度と主観的規範—, 八戸大学紀要 34, 163-178.
- 4) 清澄良策, 芳村敏夫, 添田喬(1998). 飲酒後の呼気中アルコール濃度のファジィ推論による予測, 日本

- フアジィ学会誌 10(1), 75-80.
- 5) 眞崎陸子(2007). 北大生101人と飲酒「飲酒に関する大学生の意識調査」, 北海道大学大学院教育学研究紀要 103, 113-126.
  - 6) 水野敏明, 大塚三雄, 橋本真弓(1998). 大学生の飲酒とストレスに関する調査研究 中日本自動車短期大学について, 中日本自動車短期大学論叢 28, 103-112.
  - 7) 水野敏明, 大塚三雄, 橋本真弓(2003). 大学生の飲酒に関する研究(4)中日本自動車短期大学生について, 中日本自動車短期大学論叢 33, 81-92.
  - 8) Nomura H, Matsui N (2008). Ethanol enhances reactivated fear memories. *Neuropsychopharmacology*, 33, 2912-2921.
  - 9) Ohtsu K (1984). Alcohol drinking patterns among University students. *アルコール研究と薬物依存*, 19(3), 211-229.
  - 10) 齊藤千景(2008). ピアエデュケーションの手法を用いた飲酒防止教育の研究—大学生へのアルコールハラスメント防止教育を通して—(抄録). 東京都教職員研修センター 平成19年年度 大学院派遣研修 研修成果報告書: 5-6.  
(<http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/information/sk.../14-03-saitou.pdf>)
  - 11) 高橋祐加, 河合祥雄(2010). 順天堂大学スポーツ健康学部生の飲酒意識調査(1)飲酒状況と飲酒の強要, 順天堂スポーツ健康科学研究 2(3)(通巻57号), 99-105.
  - 12) 高橋祐加, 河合祥雄(2010). 順天堂大学スポーツ健康学部生の飲酒意識調査(2)アルコールへの意識, 飲酒教育のあり方, アルコールと運動, 順天堂スポーツ健康科学研究 2(3)(通巻57号), 106-112.
  - 13) 谷本千恵, 村山正子(1998). 大学生の飲酒行動と意識—遺伝素因と自覚体質が及ぼす影響—, 富山医科大学看護学会誌 1, 35-48.
  - 14) Thomasson H R, Edenberg H J, Crabb D W, Mai X L, Jerome R E, Li T K, Wang S P, Lin Y T, Lu R B, and Yin S J (1991). Alcohol and aldehyde dehydrogenase genotypes and alcoholism in Chinese men. *Am J Hum Genet.* 48(4), 677-681.
  - 15) Wadler GI, Hainline B 監訳 西勝英(1994). スポーツと薬物 *Drugs and the Athlete*, アルコール医薬ジャーナル社: 136-145.

(平成24年7月2日 受付)  
(平成24年7月12日 受理)